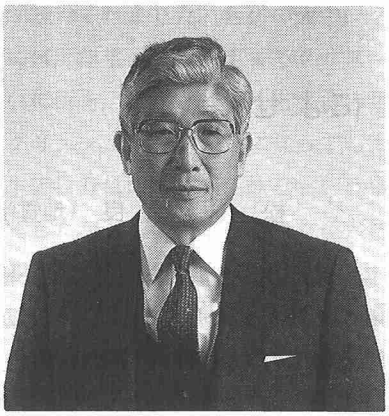
理学部四十年の日々

飯島　　東（地質学教室）



1951（昭和26）年４月に駒場の教養学部から本郷の理学部へ進学以来，早くも40年が経過した。２号館にあった地質学教室で学部，大学院生活を送り，助手として理学部教官の一員になった1958（昭和33）年４月からでも33年になる。花の新制第１期として話題を集めたのも遠い過去のことになった。思い起こしてみると，小学校に入学して国民学校を卒業し，旧制中学に入学して新制高校を卒業しと学制の変化をまともに体験したことになる。大学院は数物系研究科を修了したが，ある時理学系に変わった。今また理学部から理学院への転換が進められている。

教授に就任して間もなく，理学部将来計画委員会に地球科学分野代表の委員として参加した。将来の理学部の教育研究制度はいかにあるべきかについて先ず議論し，大学院を中心に置くものだったと思うが，その理想を新キャンパスに建設すべく構想が纏められた。差し当り実現する目途は無かったが，その代わりに自由度が大きく結構楽しい作業であった。現在進められている理学院構想は，予算獲得の必要に迫られて急浮上したとの感を拭い得ない。もっとも，地質学教室の予算を見ても，講座当りの年間予算は，10年以上前の２号館時代とほぼ同額かむしろ減額している。その間の物価上昇を考慮に入れるとひどいものである。２号館時代は教室の設備調度費として百万円以上使えたが，５号館移転後はこの費目は無い。常用している分析器機が故障を起こすと，数十万円の修理費を捻出するのに四苦八苦する。また，欧米の大学教授は少なくとも年１回は国際会議に参加する出張旅費を持っているが，文部省の国際研究集会派遣旅費は宝くじのようなもので，今までに３回当った。私は幾つかのＭＩＴＩ関連機関の委員会に関係している。例えば，石油天然ガス資源基礎試錐調査では年間百億円近い予算が11年間続き，毎年２～３本の深掘り試錐が掘削されている。私は多数の，最深６㎞にも及ぶ試錐で得られた貴重で高価な岩石資料を研究することができ，試錐資料を使って自由にその結果を公表できるという幸運に恵まれた。このような事は欧米では滅多に出来ない事である。ＭＩＴＩ関係の予算が大学のそれに比べて余りにも豊なのを見ると，昔と違って理学部でも産学共同研究が奨励され，冠講座の研究所も設立される世の中，東大もいっそのことＭＩＴＩ所管になった方が予算面では良いのではないかと思うことすらある。

1965／66年，Post-doc としてUC Berkeley に招かれて滞在した。西海岸でも日本車は滅多に見られない１ドル360円時代だったので，数々のカルチャーショックを受けた。東大では，東大を卒業して学位をとり，東大の教官となる生え抜きが普通だと話したら，それでは新しいアイデアが産まれないではないかと言われた時は盲点をつかれた思いがした。また，世界的に著名な先生が退官される際，貴方の後任はと尋ねたら，Berkeleyでは学問はその人一代限りと微笑みながらの答にも深い感銘を受けた。

理学部四十年間は実に充実した有意義な日々であった。ただ一つの心残りは，新しい理学院に参加できない事である。最後に，縁の下の支え役としてお世話頂いた歴代の事務長はじめ事務部の方々，並びに地質学教室の職員の方々に厚く御礼申し上げます。理学部の発展と皆様の御健勝を祈ります。